

## 第九節 教育

### 一 学校教育

#### (一) 尋常高等小学校

##### 1 世相と教育

昭和十年代の教育について記述をすすめるに当たっては、特に当時の時代的背景を考える必要がある。

##### ア 戦争の推移

昭和六年の秋、旧満州の奉天（いまの瀋陽）郊外での鉄道爆破事件を契機として、日本と中国の衝突が起り、関東軍はたちまち全満州を占領した。この満州事変以後、翌昭和七年の上海事変へと、日本は戦争の泥沼に落ち込んでいった。そして昭和十二年日中両国の全面戦争へと発展し、戦場は華北から華中さらに華南へと拡大した。

中国は徹底抗戦を続け、イギリスとアメリカは中国を助けて日本に当たり、いつ終わるとも知れない長期戦の様相を呈し、しだいに国際戦争の姿を示すようになっていった。ついに、昭和十六年十二月八日「大本営陸海軍部発表、帝国陸海軍は本日未明、米英軍と戦闘状態に入れり。」という、ラジオの臨時ニュースが流され、太平洋戦争に突入したのである。

#### イ 学徒動員

日米開戦のころまで大学生・専門学校生徒は、徴兵検査に合格しても、卒業までは兵役につくことを延期することができた。ところが昭和十八年に東条内閣は、これをやめて学生・生徒を猶予せず兵役に服せしめた。また学校報国隊といって学徒の軍事教練を強化し、ついには文科・法科などは戦争に役立たない学問であるとして、その学科の統合あるいは廃止を命じた。また在学期間中の三分の一は、勤労働員といって国防のための土木工事も、軍需品生産工場の労務につかされた。

#### ウ 国民精神総動員

当時の政党はまったく有名無実になったが、近衛内閣は新党運動を起こし、軍人・官吏をも含む政治団体とし

て、昭和十五年十月大政翼賛会というものをつくった。これは政府に協力する全国機関であり、政党はすべて解散した。

大政翼賛会の下部組織として、隣組をつくり、町内会や部落会を通じて、役所の指示を各戸に伝える仕組みにした。隣組は毎月何回か常会を開き、出征兵士の見送りや防空演習などについて打ち合わせを行い、必要品の配給などを回覧板で通達した。

## 2 学校のように

### ア 教科書の改訂

当時の教科書は国定で文部省が著作権を有していたが、昭和八年の改定版から軍国調に変わっていった。小学一年生の国語教科書は、それまで「ハナ ハト ママス」で始まっていたが、改訂版は「サイタ サイタ サクラガサイタ」として、日本の国華としての桜をとりあげた。次に「ススメ ススメ ヘイタイススメ」となり、兵士の勇ましいようすを小学一年生にうえつけ、あこがれを持たせようとした。

### イ 西暦と皇紀

キリスト生誕四年後を紀元とするヨーロッパの西暦に  
対し、日本では神武天皇即位の年を紀元とする皇紀を使用していた。昭和十五年が皇紀二千六百年に当たるということで、記念の式典や行事が盛大に行われた。

内城校沿革誌によると、皇紀二千六百年記念事業として、校門の改築が行われている。

#### ウ 私の学校時代

#### 末川 てる子 (国頭)

私は、昭和九年四月に尋常科一年生に入学し、同十七年三月に国頭国民学校高等科卒業生として巣立ちました。が、四十年余り昔の学校生活をふり返って、述べてみたいと思います。

「サイタ サイタ サクラガサイタ」と読み書きを始めたのが、当時の西校舎のはずれで、男女とも着物にはだし、ふろ敷に教科書やノートを包んでの登下校でした。男女共学の二学級編成で、オルガンが唯一の楽器で、その伴奏に合わせて「きれいにかざった飛行機が」と歌いながら踊ったものでした。二年生の時は教室不足で、午前と午後に分けられた授業が続く、三年生の時に、男女別の二組に編成され卒業まで続きました。

昭和十二年、四年生の時に日支事変、高等科二年の時

太平洋戦争となり、卒業するまで戦時体制下の学校でしたので、戦争につながるいろいろな行事が行われました。この時代独特の用語として「一億一心、正午の祈念」「挙国一致」「興亜奉公日」などを習字の時間に書いたものです。また「綴り方」や「唱歌」も戦争にまつわるものが多く、戦勝のたびに昼は旗行列、夜はちようちん行列が行われ、出征兵士が出て行く時には、軍歌を歌って港まで送り、各小学校で催されていた戦没者の町葬にも参加しました。健児団訓練でのラッパの音に合わせた勇ましい分列行進、学校対抗の舟漕ぎ競走、それに備えての溜池での猛練習など、思い出はつきません。校庭拡張工事の際には、父母とともに土を入れたザルを頭にのせて運びました。

当時はさつま芋が主食でしたので、学校での昼食も、いもをハンカチに包み、塩か漬物がおかずで、時々、黒ざとうや落花生に塩を少しませたものが持てると大喜びでした。遊びとしては、「国取り」「チャージャー」「ケンボ」「ジャンケン遊び」「ゴムとび」「ベースボール」「頭切り」「こままわし」「竹馬」などでした。

学習資料に乏しく、教科書のほかに参考書を一冊持て

ればよいほうで、先生方の教えと教科書で、がむしやらに勉強したものです。

生活面では、夏になると飲料水が不足がちで、井戸や暗川では、晩おそくなるまで順番を待っての水くみの苦労もありました。学校でも、暗川から学校のタンクに水運び入れたこともあり、一升びんに水を詰めて学校に各自持参したこともありましたが、私どもの卒業後、学校に井戸ができ、その難が解消されたようです。

### 3 教職員名簿(昭和十二年四月～十六年三月)

ア、和泊尋常高等小学校

(出身地)	(職名)	(氏名)	(着任年月)	(離任年月)					
鹿兒島市	訓導	初 英四郎	二二・三	一三・一〇	玉城	英一	一三・三	一五・三	
和泊町手々知名	"	逆瀬川セツ	二二・三	一七・三	"	沖 貞	一三・三	一六・三	
瀬戸内町阿室釜	"	泰江 禎良	二二・三	一五・三	"	中山 トミ	一三・三	一六・三	
和泊町古里	"	古村 安熊	二二・三	一四・三	"	城村 ミツ	一三・五	一四・八	
鹿兒島市	"	富田 松二	二二・三	一四・三	"	松元 新彦	一三・一	一六・三	
伊仙町阿権	代用教員	島岡 盛蔵	二二・三	一二・八	"	柴 喜与博	一四・三	二三・三	
和泊町和泊	校長	橋口 盛隆	二二・三	一五・三	"	朝戸大屋治	一四・三	一九・三	
"	訓導	中村 静造	二二・三	一三・三	"	伊地知吉敏	一四・三	一五・三	
"	"	安藤佳一郎	二二・三	一三・五	"	義原 福慶	一四・三	一六・一	
天城町兼久	"	和田 隆喜	二二・八	一六・八	"	藤岡 実基	一四・三	一七・三	
和泊町和泊	"	中村 良明	二二・九	一九・三	"	有川 みね	一四・三	一九・八	
					"	梶原 いね	一四・三	一九・三	
					"	沖 次子	一四・九	二二・三	
					"	田畑 勝二	一五・一	二二・三	
					"	川畑 一郎	一五・三	二〇・三	
					"	富 江規良	一五・三	一六・八	
					"	東 仲一	一五・三	一八・〇	
					"	橋口 富一	一五・三	一八・三	
					"	神崎 西国	一五・三	一八・三	
					"	土持 六男	一五・三	二三・三	
					"	清原 カネ	一五・三	二〇・三	
					"	永井 清之	一五・三	一六・三	
					"	伊仙町阿三			
					"	伊仙町阿三			

### イ、国頭尋常高等小学校

和泊町古里	訓導	上村 前富	二二・四	一三・三	和泊町国頭	先田 茂悦	一五・四	一八・三	
和泊町大津勘	"	徳田 英亮	二二・四	一四・三	伊集院町	野元 親弘	一五・四	二二・三	
和泊町手々知名	"	玉起寿芳	二二・四	二二・八	和泊町和泊	泉川 中文	一五・五	二二・三	
"	"	重村 邦英	二二・四	一九・三	伊仙町	本部 アキ	一六・一	二二・三	
笠利町喜瀬	"	牧井 達雄	二二・四	一五・三	和泊町喜美留	大山喜正二	一五・四	一五・一	
和泊町和泊	"	丸野 フジ	二二・四	一三・三	和泊町手々知名	井手籠敏子	一五・四	一八・九	
和泊町田皆	"	窪田 キク	二二・四	一四・一	"	福山 文恵	一五・七	一八・三	
和泊町和泊	代用教員	川畑 義仁	二二・四	一三・一〇	和泊町瀬利覚	植村 ハル	一五・一	一六・三	
徳之島町諸田	"	栄喜 隆徳	二二・四	一七・三					
伊仙町	"	仲 岩忠	二二・四	一二・八					
与論町那間	校長	竹下直宜見	二三・四	一六・三					
和泊町手々知名	訓導	田浦 中澄	二三・四	二二・三					
"	"	今井 島忠	二三・四	二二・三					
"	"	富江 ツル	二三・四	一五・三					
和泊町西原	"	東 一雄	二三・四	二二・三					
和泊町喜美留	代用教員	伊地知実茂	二四・一	一五・四					
和泊町正名	訓導	伊井 内元	二四・四	一六・三					
和泊町瀬名	"	中村 カネ	二四・六	一六・三					
和泊町上城	"	英 シズ	二四・四	一九・三					
和泊町和泊	"	橋口 クミ	二四・四	一六・三					
笠利町	訓導	大瀬 忠三	二四・五	一六・三					

### ウ、大城尋常高等小学校

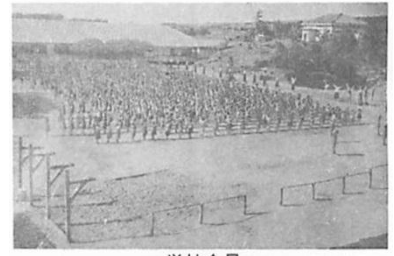
伊仙町面縄	訓導	永井 実栄	二二・三	一七・三					
天城町手々	"	園田 啓良	二二・三	一四・八					
和泊町内城	"	豊山 英敏	二二・三	一四・三					
和泊町和泊	"	山口 正文	二二・三	一八・三					
和泊町手々知名	"	奥山 直樹	二二・四	二二・八					
和泊町手々知名	"	星村 初雄	二二・九	一四・三					
喜界町	訓導	田原 初雄	二二・三	一六・三					
和泊町手々知名	"	菅村 ミネ	二二・三	一四・三					
和泊町手々知名	"	逆瀬川トキ	二二・三	一七・三					
和泊町手々知名	"	玉野 シズ	二二・三	一七・三					
和泊町上平川	"	城村 ハル	二二・三	一六・八					
和泊町国頭	"	脇田 清澄	二二・三	一六・八					
和泊町国頭	"	竹 玉寛	二二・三	一五・三					
和泊町国頭	"	福島 義直	二二・三	一九・三					

和泊町皆川	訓導	皆吉	フサ	一四・三	一九・七
和泊町上平川	代用教員	幸山頼朝		一四・九	一九・三
和泊町玉城	訓導	伊井中直		一五・三	一八・九
和泊町竿津	〃	佐伯植美		一五・三	二一・三
和泊町畦布	〃	鳥盛文		一五・三	一九・三
〃 瀬名		瀬川キク		一五・三	一六・一〇

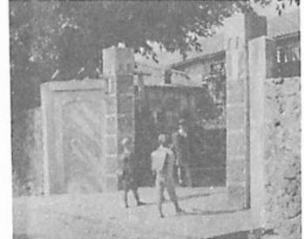
エ、内城尋常高等小学校

和泊町喜美留	訓導	井手籠敏子		一四・三	一五・三
〃 王城	〃	玉野芳久		一四・三	一八・三
和泊町久志検	〃	富江ツル		一五・三	一七・三
和泊町出花	〃	泉中安		一五・三	一七・七
〃 玉城	〃	栄マツエ		一五・三	二二・三
和泊町赤嶺	〃	嶺元ツル		一五・八	一六・一
名瀬市	代用教員	泉祐憲		一三・三	一四・三
和泊町喜美留	訓導	衛村三郎		一四・三	一四・八
〃 王城	〃	井手籠敏子		一四・三	一五・三
和泊町久志検	〃	玉野芳久		一四・三	一八・三
和泊町出花	〃	富江ツル		一五・三	一七・三
〃 玉城	〃	泉中安		一五・三	一七・七
和泊町赤嶺	〃	栄マツエ		一五・三	二二・三
名瀬市	代用教員	泉祐憲		一三・三	一四・三
赤地トヨ	〃	赤地トヨ		一三・三	一五・八
上村前富	〃	上村前富		一三・三	一五・三
根金富彰	〃	根金富彰		一二・八	一八・三
和田隆善	〃	和田隆善		一二・四	一二・八
南明善	〃	南明善		一二・四	一六・三
川辺節	〃	川辺節		一二・三	一六・三
中付里明	〃	中付里明		一二・三	一四・三
俵原宏	〃	俵原宏		一二・三	一二・八

和泊尋常高等小学校(昭和十六年)



学校全景



校門

(二) 国民学校

昭和十六年四月に国民学校令が公布された。すなわち「皇国の道に則りて初等普通教育を施し、国民の基礎的錬成を成すを目的とする。」である。

国民学校には初等科(六年)と高等科(二年)がおかれ、義務教育年限が八年になった。この改革により町内の和泊・国頭・大城・内城の各尋常高等小学校はそれぞれ国民学校と名称が変わった。

1 学校によらず

ア 国民学校時代の教育は、「戦争完遂」が大目的であり、そのため、各学校では教室正面に「天照皇大神宮」の大麻を掲げて、朝夕教児ともにこれを礼拝した。

イ 鹿児島独特の武道である「示現流」がとり入れられ、気合も鋭く、立木または横木打ちが行われた。

ウ 昭和十七年度からは、「話しことば」の教育が盛んになった。

エ 戦争の拡大に伴い、食糧増産、防空演習、応召兵の見送り、戦勝祝賀行事、戦死者英霊の出迎え、慰霊祭、町葬などが相ついで行われるようになり学習に励む時間も少なくなっていた。海洋少年団の訓練もこのころである。

オ そのうち、教師の中からも入営、応召が相つぎ、昭和十九年になると、戦況は日を追うて不利となり、本土への疎開者も出はじめ、学校の児童数も減っていった。

カ 大城校沿革誌によると、昭和十九年八月に、沖永良部守備隊(吉岡部隊)の藤田・原田両中隊は、大城国民学校の西校舎と南校舎に居を定め、校舎は兵隊の宿

舎となった。そのため学童は、校区内の各集会場で分散授業を受けることになった。

初等科一、二年は 玉城集会場

〃 三、四年 皆川 〃

〃 〃 五年 古里 〃

〃 〃 六年 大城 〃

高等科 一年 根折 〃

〃 二年 古里 〃

キ 空襲の被害状況(大城校沿革誌)

昭和二十年四月五日 銃撃を受く 東校舎

〃 四月十五日 〃 本校舎

〃 四月二十六日 〃 本校舎

〃 五月 九日 〃 本校舎

〃 五月 十六日 〃 校庭

〃 五月 二十六日 〃 西校舎、小使室

〃 七月 六日 〃 全般

〃 七月 八日 〃 全般

〃 七月 十六日 〃 西校舎

〃 七月 十七日 〃 西校舎

ク 戦時下 国頭小学校の思い出

国頭 山下 実(昭和五年十月二十四日生)

私は、昭和十二年四月一日、国頭尋常高等小学校の尋常科第一学年生として入学した。当時の校長先生は、西原出身の東貞良先生でした。新一年生は男女共学でイ組とロ組に分けられ、イ組の担任は古里出身の上村前富教頭先生、私はロ組で担任の先生は、和泊字の有川ミネ先生でした。男女混成組で勉強したのは一年の時だけで、二年生時代以後は完全に男子組と女子組に分けられました。受け持ちの先生は、男子組が二年牧井達雄先生、三年伊地知実茂先生、四年東一雄先生、五年六年泉川中文先生、高等科一年二年玉起寿芳先生、女子組は二年伊地知実茂先生、三年中村かね先生、四年橋口クミ先生、五年福山文恵先生、六年佐々木トヨ先生、高等科一年池下孝子先生、高等科二年本部アキ先生でした。尋常一年から高等二年までの八年間に、校長先生も竹下直寛先生、神川盛蔵先生、大平武雄先生へと変わりました。

私どもを直接担当された先生方のほかに、教頭先生として田浦中澄先生・村山上信先生、また徳田英亮・重村邦英・丸野フジ・川畑義仁・仲岩忠・今井島忠・大瀬忠

三・富江ツル・英シズ・先田茂悦・福島義直・窪田キク・野元親弘・大山喜正二・植村ハル・前原隆俊・安田タキ・阿多エイ・平瀬忠経・森貞助・伊集院キヨ・名越八重・高野ユキ・井手籠敏子・伊井内元・栄喜隆徳・市来ツネ子・義山正市・中島道真・龍野チエ・皆内貞三・泉中安・秋田スエ・保重安・重村玲子・脇田光夫・川畑ノブなどの先生方がおられました。

入学当時の児童の服装はほとんど和服でした。男子の中には、店で買ったかすりの着物を着ている人もいましたが、大部分は母の手織りの着物で、ひざまでの短い着物に小さな黒帯をしめて登校したものでした。学用品の持ち運びも、カバンやランドセルなどと名のつく物は少なく、ほとんどの者がふるしきに教科書や学用品を包んで登校しました。五年生のころから、ぼつぼつ洋服をつける人がふえてきました。洋服といってもその生地は、各自の家庭で母親が蚕を飼い、それからとった絹糸とばしよりの糸をませて布を織り、それをカーキ色に染め上げたものでした。国頭字にミシン一台もなかった時代のこと、仕立ても一切母の手縫いでしたから、皆パンツのような半ズボンとだぶだぶの上衣を着ていました。戦

争が激しくなるにつれて衣料品はますます乏しくなり、着物も洋服もパンツも皆つぎはぎだらけのものばかりになりました。しかしそれでも「欲しがりません、勝つまでは」の標語のもと、歯を固く食いしばって頑張り通しました。かぜなどをひく児童もほとんどいませんでした。

そのころの学童の最高の理想は軍人になることでした。そうしてゆくゆくは陸軍大将か海軍大将になりたいと考えていました。軍人として大成するためには学問が大事だということで、三月末の卒業式や修業式に優良賞をいただくように頑張らなければとって努力したものです。

私どもが一年生として入学した昭和十二年に日支事変が起こり、たくさんのおじさんたちに召集令が下りました。昨日まで畑で土だらけになって働いていた真黒い身体にカーキ色の在郷軍人服をつけて赤いタスキをかけ、ららんと輝く目にその決意を示しながら応召して行きました。勇躍応召して行った軍人軍属の中には「護国の鬼」となって、生きてふたたび郷里の土を踏むことが出来なかった人たちがたくさんいました。戦争が激しくなるにつれて戦死者が続出し、今日も明日もというふ

うに村葬が行われました。村葬に参列するのは上級生でした。村葬も最初の程は多くの村民が参列して盛大に行われましたが、あまりにも村葬の数が多かったので、だんだん淋しいものになってしまいました。

戦争が拡大するにつれて、いろいろな物が不自由になって来ました。その中でも一番こまったものは米です。国頭は沖永良部の島でも一番水利に恵まれない所で、米がとれないのです。「今年こそは」といって、充分に堆肥を入れたりそ鉄葉を切り込んだりして、一期作も二期作も植えるのですが、水が続かずせつかく植えた稲が全部枯れてしまうのです。和泊町では毎年旧暦の九月十九日に郷社高千穂神社の例祭を催し、その後で町内四尋常高等小学校の奉納相撲が行われていました。各学校、尋常一年から高等二年まで、各学年三名ずつの選手が出るのです。国頭校から出る三名の選手の中、一人は和泊校の選手と一人は大城校と、一人は内城校と対戦するので、私どもが一年生の時の選手は、田中賢吉君と原野徹三郎君と村山良直君の三名でした。国頭校は児童数は割に多かったが、相撲の成績はあまり芳しいものではありませんでした。そのたびごとにお父さんやお母さん方が

「他校の選手は米のご飯を食べているので肥えていて力も強いが国頭の子どもたちは米がなくて、から芋ばかり食べているからやせて弱いのだ。」と言って残念がっていたのを思い出します。

昭和十六年の末、日支事変は大東亜戦争へと発展し、「勝った 勝った また勝った」と勝ち戦の勢いに乗って、戦線は次から次へと拡大されていきました。十二月八日の開戦を契機に、政府は今までであった「興亜奉公日」を「大詔奉哉日」と改めました。「大詔奉載日」には全校児童に対して校長先生が訓示をしました。その後私たちの担任の先生が「もう日本人には優劣の差はない。日本人は世界の最優秀民族だ。君たちは良い時代に生まれました。戦争に勝った暁には、世界各国に行つて日本語の先生になるのだ。」と言われ、私たちも「どこの国へ行つて日本語の先生になろうか。」と真剣になつて考えたものでした。そのころは全国民挙げて必勝の意気に燃え、大人も子供も、口を開けば「滅私奉公」「二億一心」「国民皆兵」「鬼畜米英撃ちてし止まん」とかい言葉ばかりでした。

心身鍛練のため、学校では毎日乾布摩擦や団体訓練、通村幸英氏・福峯哲磨氏等が畑を無料で貸して下さったので、合計二町歩程の耕地を耕して食糧増産に励みました。なおその上に、高等科の男女生徒は、遠く皆川字の下まで出かけて行き、荒地を開墾して麦を作りました。また出征軍人や軍属の家庭では働き手がいないために思うように食糧増産が出来ません。農繁期の都度高等科の生徒が手分けをしてその留守宅に奉仕作業に行きました。

越山に守備隊が駐屯するようになってから、高等科の生徒は、一週間のうち三日ずつ陣地構築作業に行くようになりました。その作業に行く時は、暗いうちに起きて朝食をすませ、鍬やヒヤギ、それから芋弁当を持って出かけ、八時ごろまでには越山に到着したものでした。越山では兵隊さんの指示に従つて、横穴掘り、縦穴掘りに協力し、竹やり訓練の指導を受けたことも度々でした。作業の終了は午後四時ごろで、国頭の自宅に帰り着くのは日暮れ時でした。

沖繩戦が始まろうとするころからは、空襲で学校は危険だということで、ヒジャゴ山で学習したこともあり、昭和二十年三月、数千隻の米艦隊が沖繩を取り囲み、

それに示現流の練習、後は竹やり訓練まで行われるようになりました。全国民は必勝の信念に燃えて、全力を尽して頑張りました。特に若い男女の意気は物すごく、男子は志願兵や産業戦士として、女子は看護婦や産業戦士として、次々に応募して行きました。私たちが高等二年のとき、現在の町役場、当時の和泊国民学校で、海軍志願兵の採用試験がありました。町内の男子が先を争つて受験、私もその一人でした。最初の学科試験には大部分の者が合格しました。次の身体検査で合格、不合格に分けられました。私は身長が一センチメートル足りないために不合格でした。徴募官が「お前たちの愛国の至情は誠に尊いものであるが、今入つても小さなお前たちに合う洋服がない。これからも一生懸命勉強し、身体を鍛えてまた来年受験しなさい。」と言われました。予期していたことではありましたが残念でたまりませんでした。私たちの同級生から四名だけ合格しました。

昭和十六年四月から、学校の名が「国頭国民学校」と変わりました。そのころ一番強調されたのは食糧増産で学校では高等科はもちろんのこと、尋常三〜四年まで畑を借りて芋や麦を作りました。末川白秋氏、田中宗治氏・

終日、何万発という無気味な艦砲射撃の音がきこえ、沖永良部の沖にも米艦が姿を現すようになり、それと同時に本格的な空襲が始まりました。沖永良部の上空には、常時グラマン機が数機飛来し、絶えず機銃掃射を繰り返しました。空襲と同時に学校は休校になりました。島民は老若男女全部、鐘、乳洞くつや防空壕(こう)に待避し、から芋植え等の増産活動は、夜間に徹夜で実施しました。

米軍機の焼夷(しょうい)実砲射撃の前に、カヤぶきの住宅はあまりもなく燃えてしまうので、屋根のカヤを全部はがし取つて骨組みだけにし、家族は砂糖小屋や防空壕(こう)などで生活するようになりました。沖繩戦は日一日と激しさを増し「米軍は沖繩を制圧してから次は山が少なく平地の多い沖永良部島に上陸しそうだ」といううわさが流れるようになりました。最後の死に場所として、全島民が各町内会単位(国頭は現在の一・二小組合を合わせて第一町内会とよんでいた)に越山に待避(こう)を掘ることにまりました。私たち高等科生も両親と共に待避(こう)掘りに行きました。午前十一時ごろでしたか兵隊さんが「国頭の学校が燃えている」と言ったので、学校の見える高い所まで夢中で駆け上りました。学校一帯は黒煙に包ま

れ、トタン屋根の西校舎が火をふいて燃えているのが見えませんでした。町内会員一同、声を発する者もなく、皆両眼に涙をいっぱい浮べ、すすり泣きながら見ていました。国頭の学校は高台にあるのはつきりと見え、その上偽陣地も掘ってあったせいか殊の外空襲がはげしく、学校が焼失しただけでなく、校地内やその周辺に二百五十キロ爆弾が十数発落下し、直径十数メートル、深さ十メートル程の大穴がたくさんできました。ただ一つだけ残っていた南校舎の板壁等も全部爆風で吹きとばされて裸になつてしまいました。私達が指折り数えて待っていた卒業式も無期延期になり、空襲下で四月・五月と重苦しい毎日が続き、六月の終りのある雨上りの暑い夕方、卒業生とその父母だけがヒジャゴ山にあつまり、米軍機の爆音におびえながら、淋しい卒業式をすませた。

2 教職員名簿(昭十六・四〜昭二一・三)

ア 和泊国民学校

(出身地)	(職名)	(氏名)	(着任年月)	(離任年月)
和泊町畦布	訓導	永吉 毅	一六・三	一九・八
和泊	川 ヨネ	一六・三	二〇・二	
和泊	佐土原 常	一六・三	二二・三	
和泊	橋口 クミ	一六・三	二二・八	

根折	新里 窪秀	一六・三	一九・三
天城町	栄 哲義	一六・四	二一・八
和泊町国頭	脇田 清澄	一六・八	一六・一〇
和泊町田皆	脇田 内熊	一六・二	一八・三
和泊町国頭	宮原 重義	一六・三	二一・八
和泊町小米	山崎 宏	一七・三	二一・三
和泊町和泊	中原 トミ	一七・三	二一・三
和泊	手々知名	一七・三	二一・三
和泊町屋子母	逆瀬川 トキ	一七・四	二一・三
和泊町和泊	安田 静枝	一七・四	一九・三
和泊	木脇 祐勝	一八・三	二〇・二
和泊	武官 恭子	一八・三	二二・八
和泊	秋葉 フミ	一八・三	二四・八
和泊町小米	森 高秀	一八・四	一九・八
和泊町内城	村山 本吉	一八・四	二一・三
和泊町瀬利覚	植田 ツル	一八・四	二一・三
和泊町和	大山 茂博	一八・九	一九・三
和泊	新納 盛定	一八・一〇	二一・三
和泊町上城	脇田 光夫	一九・二	一九・三
和泊町畦布	井手龍敏子	一九・三	一九・三
和泊	山口 鳥嶺	一九・三	一九・三
和泊	島 盛文	一九・三	一九・三
和泊	森 西元	一九・三	一九・三
和泊	前原 隆俊	一九・三	一九・三
和泊	甲 東寿	一九・三	一九・三
和泊	南 明善	一九・三	一九・三

イ、国頭国民学校

国頭	福嶺 ツル	一九・八	二〇・二
根折	大山 安弘	一九・九	二三・三
和泊町余多	今榮 テル	二〇・三	二三・三
和泊町根折	池田 スミ	二〇・三	二三・三
和泊	大山 ウメ	二〇・三	二〇・二
和泊	甲 東哲	二〇・九	二七・四

ウ、大城国民学校

和泊町西原	徳留助四郎	二〇・四	二二・三
和泊町王城	大野 チカ	二〇・四	二二・三
和泊	川畑 ノブ	一九・二	二〇・二
和泊	脇田 光夫	一九・九	二〇・一
和泊	重村 玲子	一九・九	二一・三
和泊	保 重安	一九・九	二一・三
和泊	秋田 スエ	一九・九	一九・二
和泊町国頭	泉 中安	一九・九	一九・二
和泊町国頭	福島 義直	一九・九	一九・三
和泊町屋子母	大平 武雄	一九・九	一九・三
和泊町上城	皆内 貞三	一九・一〇	一九・三

和泊町知名	校長 神川 盛蔵	一六・四	一九・三
和泊町国頭	訓導 前原 隆俊	一六・四	一九・三
和泊町余多	安田 タキ	一六・四	一七・四
和泊町和泊	阿田 エイ	一六・四	一六・九
和泊町余多	平瀬 忠経	一六・四	一六・六
与論町	森 貞助	一六・一	一七・八
知名町下城	市来ツネ子	一六・四	一八・三
知名町西原	訓導 佐々木トヨ	一七・四	二二・三
和泊町西原	訓導 高野 ユキ	一七・四	二二・三
知名町瀬利覚	助教 義山 正市	一七・五	一八・二
伊仙町	助教 中島 道貞	一七・一	二二・三
和泊町西原	訓導 村山 上信	一八・四	二二・三
和泊町西原	訓導 名越 八重	一八・四	二二・三
和泊	池下 孝子	一八・四	二六・三
和泊	龍野 千エ	一八・四	二二・三
和泊	助教 新納 照子	一八・一〇	二二・三

天城町松原	春山 文夫	一六・三	一七・三
和泊町王城	玉野 フミ	一六・三	一七・三
和泊	甲 東寿	一六・八	一八・三
和泊	上村 文枝	一六・八	一七・三
和泊	赤地美津子	一六・一	一八・三
和泊町赤嶺	助教 清原 ツル	一七・三	二一・三
和泊	清原 ツル	一七・三	一八・三
和泊町和泊	武宮 恭子	一七・三	一八・三
和泊	橋口 トシ	一七・四	一七・三
和泊	宮里 マツ	一七・四	一九・三
和泊	住用村城	一七・四	一九・三
和泊町根折	池田 スミ	一八・一〇	一九・三

和泊町手々知名	校長	武田惠喜光	一八・三	二二・三
徳之島町母間	教頭	小林 秋心	一八・三	二二・三
和泊町和	訓導	束 愛久	一八・三	二三・三
和	和	鎌田 時秀	一八・三	一八・二〇
玉城	和	栄 ナツ	一八・三	二二・三
和泊	和(裁専)	川辺 節	一八・三	二三・三
和泊	和	福山 文恵	一八・九	二〇・八
永嶺	和	永野 忠敬	一八・九	一九・一
和泊町根折	訓導	新里 窪秀	一九・三	二三・三
古里	和	爪村 邦英	一九・三	二五・三
玉城	和	大屋 中英	一九・三	一九・九
和泊町皆川	訓導	皆古キミ子	一九・三	二三・三
和	和	大山 ウメ	一九・三	二〇・八
皆川	和	中原 梅乃	一九・八	二三・三
古風	和	里村 富久	一九・八	二〇・一
王城	和	玉野 本治	一九・九	二六・五
和泊町竿津	助教	東 みつ	一九・一	二〇・一
和泊町古里	訓導	重村 達志	一九・九	二二・一
和泊町西原	校長	前原 隆俊	二〇・三	二二・一
和泊町和泊	訓導	東 一之	二〇・二	二二・一
和泊町国頭	訓導	石原 茂吉	一六・三	一七・三
和泊町和泊	訓導	中原 トミ	一六・三	一七・三

エ、内城国民学校

々	和泊	武宮 輝	一六・三	一七・二
知名町屋子母	和	大平絵美子	一七・三	一九・八
余多	和	富江 和枝	一七・三	二二・三
和泊町玉城	和	松元 啓造	一七・三	一八・一
和泊町瀨名	和	市来 俊一	一七・三	二五・三
徳之島町亀津	和	福元留喜慶	一七・二〇	一八・二〇
和泊町内城	和	橋口 麗子	一七・二二	二三・三
和泊町内城	和	益山 寛益	一八・三	一九・三
与論町	和	川元 フミ	一八・三	一九・二
知名町下平川	訓導	青木 徹志	一八・五	一九・三
屋生子母	和	中原 尚文	一八・二	一九・二
和泊町皆川	和	村山 茂	一九・三	二二・三
知名町上平川	和	寺原 政夫	一九・三	二二・三
和泊町内城	和	中村 良明	一九・三	二二・三
和泊	和	村山 植元	一九・三	二二・三
内城	和	中村 カネ	一九・八	二〇・一〇
瀨名	和	永吉 毅	一九・八	二三・三
和泊	和	宗村 ツル	一九・二〇	二二・五
知名町竿津	和	爪村 ヨシエ	二〇・三	二三・三
和泊町古里	和			

(三) 青年学校

鹿児島県教育委員会編「鹿児島県教育史」は青年学校教育について、次のように述べている。

「文部省が国体明徴を訓令した昭和十年から、実業補習学校と青年訓練所を統一して青年学校が設けられた。

青年訓練所と実業補習学校は、おおむね小学校に併設したもので、この両者の相互関係の調整は青年訓練所発足当初からの課題であった。昭和九年度の統計では、青年訓練所生徒八十一万八千六百八十一名、実業補習学校男生徒八十五万七千四百四名となっているが、その五十％は二重在籍であった。両者の教育内容は五十歩百歩で、校長・教員は両方を兼任し財政的にもむだが多いので、昭和十年、両方を統合して青年学校をつくった。」

さらに、目的等について次のように述べている。

青年学校は、「男女青年二対シ其ノ心身ヲ鍛錬シ徳性ヲ涵養スルト共ニ職業及実際生活ニ須要ナル知識技能ヲ授ケ以テ国民タルノ資質ヲ向上セシムルヲ目的」とするもので普通科・本科・研究科・専修科の四科をもって構成され、施設は独立校舎を要望し、小学校などに付設する場合、専用教室を設けることにした。

教授訓練期間は、普通科一カ年、本科は男子五カ年女子三カ年とし、土地の状況によつて各一カ年を短縮することができ、研究科は一カ年以上、専修科は別に期間を設けなかった。なお本科は一部と二部に分かれ、一部は定時制で男子は五年、女子は三年で卒業し、二部は男子

においては最初の二年を全日制で出校し、あとを二年定時制で通学して卒業する。女子は二年を全日制で通学すれば本科を卒業ということにした。

尋常小学校六年卒業者は普通科に、高等小学校卒業者は本科に入学し、本科卒業生はこれと相当の教養ある者とともに研究科にはいることができるようにし、専修科は特別の事項を専門に希望する者に対して許可した。教授訓練の内容は、普通科は修身および公民・普通学科・体操とし、女子には家事および裁縫科を加え本科の男子には体操の代わりに教練を課したが、女子は教練を省いて家事・裁縫および体操科を加えた。

なお普通学科・職業学科に関しては、土地の状況および学校によつて、適切な内容をもたせ得ることにした。このようにして勤労青年は、小学校を卒業するとその後七年間引続き教育を受けることになったが、就学率が前の青年訓練所時代とあまり変わらないので、政府は、昭和十四年、青年学校を義務制にすることに踏み切った。これは大正六年に設置された臨時教育会議で、また、昭和十年の文政審議会でも「速ニ青年学校義務制ノ実施ヲ期スルコト」を答申していることであつたが、義務制に



走らせた直接の原因は、日華事変であった。昭和十二年の日華事変は、戦争の長期化を予測させ、あげて青年を壮丁化することになったのである。青年学校の義務制は、昭和十四年四月に入学した普通科生徒からこれを始め、逐次入学する者を義務化し、昭和二十年には全部の勤労青年を、義務制の中で収容することにした。と同時に、青年学校には、国から教員の俸給・手当に補助金を出すことにした。しかし、戦局が緊迫化するに従って、青年学校の生徒も生産増強に動員されて勉強できず、教育内容も後退していった。

鹿児島県の青年学校は、政府の奨励に即応して県当局が大いに力を入れた。昭和十三年、県は、高等農林に付設されていた青年学校教員養成所を伊敷（今の市立鹿児島農芸高校）に移して独立させ、伊敷村立青年学校を同所内に移転新築して県立とし、同養成所の附属青年学校とした。県は、青年学校発展の礎石をここに置いたのである。のち昭和十九年に青年学校教員養成所は、青年師範学校となった。昭和十四年、男子青年に義務制がしかれると、鹿児島県は、女子にも準義務制をとった。またその振興については、青年学校独立校舎の建設に努力を

教練と食糧増産・生産教育が主になっていた。

#### ア 軍事教練

軍事教練は本科生に課せられ、一週四、五時間で、上級生は銃を持ち、手製の背のうを背負つての教練であったが、下級生は、二メートルぐらいの竹やりを持つての訓練であった。各個訓練や全生徒による閲兵分列等も行われた。年に一回は、奄美要塞司令官や同副官等により、査閲や講演も行われた。また知名青年学校との連合演習も実施された。

#### イ 精神高揚

校内で訓話の時間が設定されたほか、外部から軍の高官・関係官庁の視学・主事や有名知識人の視察や講演が数多く持たれた。

その内容としては、時局を反映して皇軍の奮戦の模様とか青年としての戦時下における心構え等を説くのが多く、この戦争の大義名分をよくわきまえて、皇民として各自の分に応じて積極果敢に行動することが大切であるということが強調された。

#### ウ 御親閲

昭和十六年五月二十二日、宮城前広場において青年学

校を傾けた。昭和十六年の統計によると、鹿児島県の青年学校は百八十四校で、専任校長が百十一名置かれている。また専任教員は一校当たり七名の平均で、他県に比してその数が多い。鹿児島県の青年学校は規模が大きく、内容が充実していることで全国的に有名であった。

#### ○ 和泊村立和泊青年学校

昭和十年四月青年学校令が公布、諸規程が定められ実業補習学校と青年訓練所が統合されて青年学校となった。和泊町（当時村）の場合、昭和十年に和泊村立和泊青年学校として発足したが独立校舎はなく、和泊尋常高等小学校に附設され、その後昭和十一年に、現在の和泊小学校の敷地に新校舎を設立して移転した。

当学校に関する書類は戦時中の空襲によって焼失し、記録に基づく著述は不可能なので、当時の教職員や生徒の記憶によってまとめた。

昭和六年の満洲事変に端を発した戦争は、拡大の一途をたどり、昭和十二年の日支事変、昭和十六年の太平洋戦争へとひろがった。このような戦時下の青年学校の教育内容は、戦争遂行のためのものと言ってよい程で軍事

校生徒に対する御親閲が行われた。朝日新聞は当日の様を次のように伝えている。

「青年訓練実施十五周年を記念する青年学校生徒御親閲式は二十二日午前十時から、畏くも天皇陛下の御親臨を仰ぎ、宮城二重橋前広場で壮厳盛大に挙行された。内地の一万八千余校から集まった代表生徒男子三万六千名、女子四千二百五十名の栄光は、この日津々浦々にて盛事をしのぶ全国三百余万全青校生の胸にも通う。

青少年生徒に勅語を賜りたる佳き日に、次代の国防の勇士・産業の戦士たちは固き御奉公の誠を誓い奉ったのである。男生は執銃着剣の武装で分列行進……鹿児島島のワラジ部隊は断然光った……。分列行進に続き女子部隊が奉唱歌を斉唱した。この日の感激はここに極まる。」

（以下略）

和泊青年学校から代表として参加したのは脇田清（国頭） 福嶺ツル（国頭・現姓脇田）の両名であった。

#### エ 増産・家事

和泊町後蘭字に田んぼを借りて米作りをしたり、谷山の松林を開墾して茶作りにも励んだ。校内では「やぎ」「ぶた」の飼育も行われた。家事の時間には代用食の作

り方等に力を入れ、食料事情が悪化していく中で、郷土産の農作物に加工した食品を工夫した。

#### オ 兵役

徴兵検査の適令に達した生徒あるいは卒業生には検査に行く時に必ず青年学校の卒業証明書を持参するよう指導した。戦争の拡大につれて、生徒の中から検査を待たずに志願で入隊する者も出てきたが、彼らの出発に際しては生徒自身の考えで壮行会を催し激励した。

このような状況の中で、昭和二十年三月一日の朝、喜美留沖に停泊中の徴用輸送船が米軍機の銃撃を受けて沈没し、その日の銃爆撃により和泊青年学校は焼失した。

昭和二十年四月以降になると、米軍機や米艦による銃砲撃、爆撃はますます激しくなり、官公署をはじめ、学校、民家の大半が被害を受けた。やがて八月十五日の終戦を迎えることになるが、無条件降伏という戦争終末は打撃が大きく登校する生徒も皆無という状態になった。

## 二 社会教育

### ○ 婦人会活動

太平洋戦争開始後間もない昭和十七年二月一日に閣議決定に従って「大日本婦人会」が結成された。それまで活躍していた「愛国婦人会」「国防婦人会」「大日本連合婦人会」の各団体を全国的に合同したもので、総裁に皇族、会長に華族、各県ごとの地方支部長に知事夫人を充て、会員は二十歳以上の全婦人であった。会の目的は、「高度国家体制に即応し、皇国伝統の婦道に則り、身を修め、家を整え、奉仕の実をあげる」であった。

和泊町では「大日本婦人会和泊町分会」を結成し、全員一丸となって銃後の守りを固めた。

服装も活動的になり、もんぺに地下たび、防空ずきん姿だった。出征兵士の見送り、戦地への慰問文や慰問袋、千人針、守備部隊の慰問演芸、戦車ごう掘り、野菜類の供出、南方への輸送船寄港の折の慰問、戦没者遺家族、出征軍人留守家族への奉仕作業等、一致団結して尽力した。

空襲に備えて天井板をはずし、大きなおけに水を満たし、ぼろ布を水にぬらした火たたき等準備して、火災から家を守るようにした。夜間には守備部隊の幹部軍人によって竹やり訓練が行われた。